

けいはんな見学会の報告

主催:日本 MOT 学会 共催:研究・イノベーション学会 関西支部

けいはんな学研都市(正式名称:関西文化学術研究都市)の現状を知るため、中心的な企業である(株)国際電気通信基礎技術研究所(ATR)とオムロン(株)の2社を見学した。

また、今回が日本 MOT 学会と研究・イノベーション学会 関西支部が連携する最初であり、今後の展開に期待したい。

日時:2018年3月26日(月)13:00~17:00

主催:日本 MOT 学会 共催:研究・イノベーション学会 関西支部

訪問企業:(株)国際電気通信基礎技術研究所(ATR)とオムロン(株)京阪奈イノベーションセンタ

合計参加人数:18名(研究・イノベーション学会 関西支部からの参加が約2/3)

(1)けいはんなリサーチコンプレックス(RC)事業 藤田 RC 推進サブディレクターが出張講演

けいはんなリサーチコンプレックス事業が、科学技術振興機構(JST)の2015年~2019年の5年間プログラムとして採択され実施されている。神戸、川崎と共に3拠点が選ばれている。けいはんなの活性化に寄与している。

(2)(株)国際電気通信基礎技術研究所(ATR)

ATRは、情報通信関連分野における先駆的・独創的な研究を推進する株式会社である。国の研究所として企画されたが、国の方針転換により、NTT,KDDIはじめ116社の出資で1986年に設立された。当初は、国から年間約80億円を得て研究していたが、この資金が出なくなると競争的資金を得て研究している。研究の出口戦略として、事業化の橋渡しをする子会社 ATR-Promotion の設立や、けいはんな ATR ファンドを設立し、研究の市場化を図っている。

ATR-Promotion では、脳研究の装置を貸し出すオープンラボ「ATR 脳活動イメージングセンタ (BAIC)」や、センサ技術の成果展開・事業化を行っている。

参加者からは、配当できているか等の質問があった。



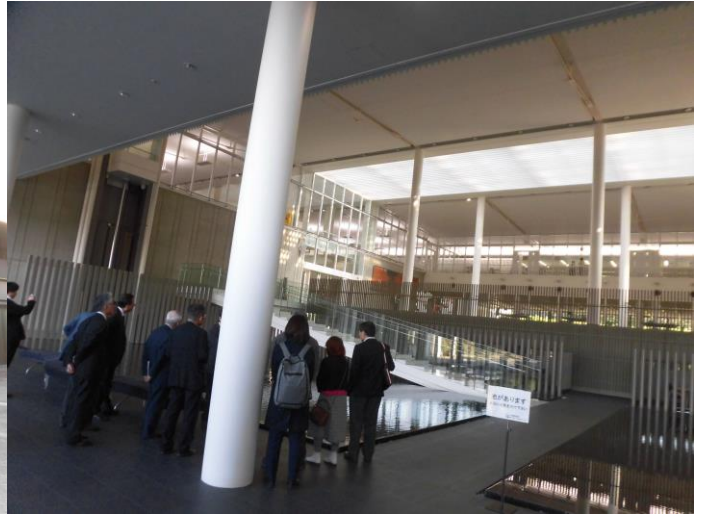
(株)国際電気通信基礎技術研究所(ATR)でのセミナー風景

(3) オムロン(株)京阪奈イノベーションセンタ

自然の中にとけこむようにデザインされた「和」をイメージした低層の建築の中に、1階入り口には室内の大きな池が配置され、ここを通過して思索に入っていくことが演出されている。



オムロン（株）京阪奈イノベーションセンタ 正門



1階入り口の室内の大きな池

オムロンは、立石一真氏がレントゲン写真撮影用タイマーを開発したのが最初で、1948年に立石電機株式会社を創業された。1900年に、社名をオムロン株式会社に変更された。研究開発では、1960年に資本金の4倍を投じて長岡京市に中央研究所を開所され、2003年に全研究部門を統合した京阪奈イノベーションセンタを開所された。外部および内部の「協創」を目指されている。

資本金 641 億円、売上 7942 億円であり、オムロングループ 36,008 人であり、海外子会社に約 2/3 が勤務する。



オムロン（株）での会社概要説明

建物内を案内してもらった。3階には、奥行120m、横幅60mの巨大な大部屋で多くの研究者が研究されていた。会議スペースも一角にある。また、2階は、トイレ等の共用スペースと共に、各種案内ビラが壁にはられたプロムナードになっている。職員が、このプロムナードを通して食堂に行くついでに、これらの案内を目にするように設計されている。プロムナードから食堂に行く大きなスペースには、だれでも使える卓球台が3台置いてあった。後で紹介する卓球ロボットが注目されてから、卓球を行う人が増え、数か月かけて卓球のトーナメントが行われている。そのトーナメント情報が、プロムナードに掲載されていた。ちなみに、訪問日に、あるカテゴリーの決勝戦が行われることが目に入った。

コンセプトの「協創」を実現するための多くの仕掛けが、建物に仕組みられていて非常に興味深かった。



1階入り口近くにある展示コーナー(S&C プラザ)を見学した。オムロンのキーテクノロジーである、移動時の防振システムや卓球ロボットが展示されていた。卓球ロボットは、CEATEC 等で展示されて大人気であり、最新型は海外に行っているとのことであるが、以前の卓球ロボットが展示され実際に試すことができた。



A T Rとオムロンの研究開発の現場を見学することにより、創造を促進するための仕掛け、アウトプットとしての技術・商品、事業化のため試み等を見ることができ、けいはんな学研都市の現状を垣間見ることができた。

その後、約半分の有志による懇親会を行い、懇親を深めた。
